

「障害¹がない」はどのような状態を指すのか —日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)²および 筑波ウェブコーパス (TWC)の分析より—

宮崎 康支 (関西学院大学大学院総合政策研究科) †

What condition does *shogai ga nai* (no disability) refer to? Analyses on Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ) and Tsukuba Web Corpus (TWC)

Yasushi Miyazaki (Kwansei Gakuin University Graduate School of Policy Studies)

要旨

本研究の目的は、日本語の書き言葉における「障害」を巡る否定の射程を、「障害がない」を事例として、「障害の社会モデル」の援用により明らかにすることである。そこで、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』および『筑波ウェブコーパス (TWC)』より「障害がない」の用例を収集した。用例の中から、「人間および人間の集団、ないし人体の一部に関する障害」を指すものを分析の対象とした。用例を、目視によって障害の「個人モデル」(医学モデル)的用法—個人における心身機能の医学的制約に焦点を置く—と、「社会モデル」的用法—社会的障壁に焦点を置く—に分類した。そして、各用例における助詞ないし形容詞「ない」が射程とする否定の対象を精査した。その結果、人体における障害に関する用例においては「個人モデル」的用法が顕著であるものの、社会的障壁を示す「社会モデル」的用法も主に法制度や社会啓発に用いられていることが明らかになった。

1. はじめに

「否定とはある事柄を念頭に、それが成り立つことを打ち消すことである。」(山泉, 2015: 188) しかし、これを句や文の単位を超えてより大きな文章ないし談話の単位でとらえると、むしろ肯定的な意味で用いられる場合がある。宮崎 (2016) は本文に「発達障害」を含む新聞記事データを定量的・定性的に分析し、文の主語によって否定の対象が変化することを示した。この点をとくに「障害」(disability)の課題について考えると、否定を、障害の原因を医学的な心身機能の制約に求める視点としての「個人モデル」と、原因を社会の構造に求める視点としての「社会モデル」の二つの見方 (Barnes & Mercer, 2010) から分類することで、文脈における意味の変容が理解できる可能性がある。

この際、多様な種別のテキストから収集された大量の用例を含むコーパスを用いた分析が、宮崎 (2016) において新聞記事データから見出されたものを超える広汎な知見を導出する可能性がある。そこで、本論文においては日本語の書き言葉について代表的な均衡コーパスである『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(国立国語研究所, 2011; Maekawa et al, 2014) および『筑波ウェブコーパス (TWC)』(筑波大学・国立国語研究所・Lago 言

¹ 本論文においては、「しょうがい」の表記は人文・社会科学および医学等における慣習に従い「障害」とした。ただし、コーパスの検索結果には「障がい」および「障碍」の表記が混在している。

² 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を指す。

† yasushi.miyazaki [at] gmail.com

語研究所, n.d.; 今井・赤瀬川・パルデシ, 2013) を用い, 二字熟語「障害」をめぐる否定のふるまいを観察する。

なお, BCCWJ と TWC の 2 つのコーパスを併用した意図は, BCCWJ においてやや手薄ともいえるウェブ上のデータを, ウェブ記事に特化した TWC によって補足することにより, 広範な書き言葉の情報を網羅することにある。また, この 2 つのコーパスは共通のインターフェースである NINJAL-LWP を用いていることから, 検索結果の均衡性を高める意図もある。したがって, この 2 つのコーパスを厳密に比較する形の分析は実施していないことを, あらかじめ断っておく。

2. 核心的な概念

以下, 本課題における二つの核心的な概念である「否定」と「障害のモデル」に注目する。前者は言語学上の概念であり, 後者は「障害を社会・文化の視点から研究する」(障害学会, 2012) 学問である「障害学 (disability studies)」における概念である。この二つの概念が交差して議論されることは少ないが, 本研究が言語研究と障害研究の架橋をねらっている側面もあることから, あえて以下に概観する。

2.1 否定

山泉 (2015) が述べているように, 「否定は命題態度の一種」(山泉, 2015:188) であり, 事柄「が成り立っていることを打ち消すという態度を表明する。」(Ibid.) すると, 分析においては, その事柄が何であるかを, まず把握する必要がある。

佐川 (1976) は解釈意味論的アプローチから, 否定の範囲 (scope) について, 前提の果たす役割を議論した。さしあたり, ここでいう「前提」とは, 山泉 (2015) における「事柄」に通ずるものもあろう。

否定には「語彙的否定形式」と「文法的否定形式」がある (工藤, 2000) が, 本論文では後者について分析を試みる。ただし, 文法的否定形式において, 「否定の接辞『ない』がついていても, 慣用的に用いられるものも多く, 否定の意図を表現しているわけではないものも多い」(メイナード, 2004: 156) ことに留意する必要がある。

以上の点を本研究課題に引き寄せると, 「障害がない」の範囲がどこにあるのか, という問題が発生する。人間が「障害」を持ちうることが前提となる場合と, そうではなくとも文の主題がいわゆる「障害者」である場合が想定されよう。これらの点に留意しながら, 本論文における分析を進めることとする。

2.2 障害のモデル

元来, 人間の心身に関する障害 (disability) は医学的な問題として捉えられてきた。学術面においても, 障害の研究は主に医学やリハビリテーション学の対象であり, その焦点は人間の心身における能力の制約を補正することに置かれてきた (杉野, 2007)。

しかし, のちに「障害学」(Disability Studies) の運動が発生する。1970 年代には英国において障害者の社会参加への権利を主張する運動が勃興し (UPIAS and DA, 1975), それを契機として障害者の社会参加を阻む社会的障壁への注目を喚起する動きが学術の世界においても発生した。この中で発想された見方が, 障害の「個人モデル (individual model)」

(医学モデル; medical model) と社会モデル (social model) (Barnes & Mercer, 2010) である。

また米国においては公民権運動の影響により、障害者の自立生活の権利を主張する動きが高まり、やはり障害についての人文・社会科学的研究が徐々に発展した（杉野, 2007）。

日本においては、1970年代に脳性麻痺の当事者たちによる権利運動の展開が注目され、こうした障害当事者による運動が、英国および米国からの障害学および障害者自立生活運動などの取り込みにも影響を与えた。そして、このことが日本における障害学の展開に結実することとなる（杉野, 2007; Nagase, 2008）。ひとつの定説としては、「日本における障害学は、『障害学への招待』（石川・長瀬編 1999）を出発点としている。」（渡辺, 2014）というものがある。

社会モデル自体については現在も論争が展開されており³、その途上において「1. はじめに」において述べたような「個人モデル（医学モデル）」と「社会モデル」の簡略な定義には賛否両論の展開が予想される。しかし、その点も含みおいたうえで、言語使用における「障害のモデル」の観点からの議論を提起すべく、以下の分析および考察を進める。

3. 研究の方法

本研究においては、人間における障害の除去を示す表現である「障害がない」に着目した。

まず、「障害がない」という表現について、BCCWJおよびTWCにおいて度数調査を実施した。検索系としては、BCCWJについてはNINJAL-LWP for BCCWJ⁴、TWCについてはNINJAL-LWP for Tsukuba Web Corpusを用いた。この検索は2020年7月4日に実施された。

この際に収集された用例を、目視によって「人間および人間の集団、ないし人体の一部分に関する障害」に関連する用例（これを、「分析対象」とする）と、「人間および人間の集団、ないし人体の一部分に関する障害」に関連しない用例（これを、「分析対象外」とする）に分類した。この際、前者の対象は医学上のインペアメント（impairment）⁵に限らない（例：外交上の「障害」など）。そして、前者を次章にて述べる用例分析の対象とした。

度数は表1のとおりである。

表1「障害がない」の度数表

	分析対象	分析対象外	合計
BCCWJ	28	10	38
TWC	433	55	488

³ 社会学の立場による「社会モデル」の限界にかかる議論については榊原(2019)が詳しい。また、英国においては新たな stronger social model(より強い障害モデル)としての social model of human rights(人権の社会モデル) (Berghs et al, 2019) といった新たな障害モデルの展開も提起されつつある。

⁴ BCCWJの検索にNINJAL-LWPを用いた場合、著作権の都合上BCCWJ出版サブコーパスのうち「新聞」の検索が不可能である（赤瀬川 2016: 43）ことに留意されたい。したがって、本論文における分析対象からはBCCWJに収録された「新聞」データは除外されている。

⁵ 本論文でいう「インペアメント」は、人間の心身における機能の制約を指す。

次いで、用例を目視により次のように分類した。

- (1) 「個人モデル」による表現（「個人」）か、「社会モデル」による表現（「社会」）か、あるいは双方に交差する表現（「個人/社会」）か
- (2) 主体は人体か組織⁶か

上記の基準により分類された度数をピボットテーブルにより可視化した。

そして、度数調査に次いで用例分析を実施した。用例分析においては、否定辞ナイの焦点に着目し、分析を行った。

4. 結果

まず、BCCWJおよびTWCにおける用例を分類した結果を以下に示す。BCCWJについては表2の通りである。

表2 BCCWJにおける「障害がない」の分類

個人/社会	人体/組織	集計
個人	人体	19
	組織	2
個人 集計		21
個人/社会	人体	3
個人/社会 集計		3
社会	組織	4
社会 集計		4
総計		28

TWCについては表3の通りである。

表3 TWCにおける「障害がない」の分類

個人/社会	人体/組織	集計
個人	人体	347
個人 集計		347
個人/社会	人体	28
個人/社会 集計		28
社会	人体	41
	組織	16
	組織	1
社会 集計		58
総計		433

⁶ 本論文でいう「組織」は、狭義の「組織」のみならず集団や社会一般をも指す。

上記の分類を観察すると、多数を占めるのは「個人モデル」による「人体」の表現である。典型的なものとして、下記の用例がある。

- (1) しかし、そのうち足に障害がなくて、こちらの指示に確実に従ってくれそうな人はたったの四人。

【出典】BCCWJ サンプルID : LBj3_00153 大熊一夫 (著) 『ルポ・有料老人ホーム』
(下線は本論文の筆者による。以下同様)

この用例 (1) においては障害の所在が人体のうち「足」にある。

一方、わずかながら障害の所在が「組織」にありながら「個人モデル」を用いている用例がBCCWJにおいて2例検出された。しかし、2例ともウェブ上の記事から収集された用例であり、本論文執筆当時においては元記事がウェブ上で検出されなかったことから、本論文には掲載しない。

続いて、「個人モデル」と「社会モデル」の交差について観察する。これは、双方のモデルが重複する表現を指す。例えば、次のような用例がある。

- (2) ハンディキャップを負っている人々の行動をはばむ物的・心的障害がない、すなわちハンディキャップをもたらさないということを意味する。

【出典】BCCWJ サンプルID : OT53_00007
『家庭基礎 自分らしい生き方とパートナーシップ』

「物的」は社会的障壁とも理解できることから「社会モデル」的な表現とも捉えられるが、「心的」は個人による物事の見方にも関係することから、「個人モデル」的な表現として捉えることも可能であろう。

続いて、「社会モデル」的表現について観察する。こちらは、BCCWJとTWCにおいて異なった傾向が見られた。BCCWJにおいては4例とも組織に対するものであった一方で、TWCにおいては人体については43例、組織については17例が検出され、人体に対する社会的障壁に言及するものが見られた。

まず、BCCWJにおける用例を示す。

- (3) アメリカの考案した戦後体制が、主として世界的な自由放任主義を実現し、その政策を通じてアメリカ中心に回る世界経済をもたらすためであったにもかかわらず、IMFと世界銀行へのソ連の加盟には、何も大きな障害がなかったように見える。

【出典】BCCWJ サンプルID : LBq3_00167
マイケル・ハドソン (著) ; 広津倫子 (訳) 『超帝国主義国家アメリカの内幕』

この用例においては、主体は「ソ連」⁷という国家であり、障害は「ソ連」を巡る国際情勢であると考えられる。つまり、「アメリカの考案した戦後体制」に代表される、「ソ連」を取り巻く国際情勢の持つ障壁が「IMF⁸と世界銀行へのソ連の加盟」を阻害する可能性

⁷ 日本語の呼称「ソビエト社会主義共和国連邦」の略称。

⁸ International Monetary Fund (国際通貨基金) の略称。

がある、という前提を否定辞ナイによって打ち消したのである。

続いて、TWCにおける用例を示す。「人体」についての「社会モデル」的用法には以下のものがある。

- (4) そして今、男女平等の社会となり、女性がどんな道へ進むにも全く障害がない時代になりました。

【出典】 https://www.jaxa.jp/article/interview/vol59/index_j.html

この用例においては、主体は「女性」であり、否定の対象は「男女平等の社会」の対極にある「男女平等ではない社会」、つまり「男女間の不平等がある社会」と考えられる。「男女平等の社会」によって、女性の進路選択における障壁がなくなった、というのが、この記事⁹における用例の主旨である。これは人体の医学的な障害に関するものではないが、動物としての人間が主語となっていることから、この区分に含めた。

以上、「障害のモデル」の区分と「主体」の区分の組み合わせにおける用例を観察した。今回使用したコーパスが作成された時点においては、「個人モデル」的用法が支配的であるものの、「社会モデル」的用法も観察された。ただし、「社会モデル」的用法については、人体におけるインペアメントとしての障害を取り扱ったものは少なく、むしろ人間の社会的役割について述べたものが多く検出された。

5. 考察

以上、簡潔ではあるが否定辞ナイを事例として、「障害のモデル」に関する否定の射程についての分析を試みた。少なくともコーパスにおいては、「障害」の取り扱いについては医学的な見方が支配的である。一方、人間の社会生活における「障害」について観察すると、様相が異なってくる。用例 (4) における女性の社会進出に関する語りでも見られたように、「社会モデル」はインペアメント以外の、より人間関係や社会関係上の事象について先行している。

つまり、『障害がない』はどのような状態を指すのか」という問いに答えるとすれば、少なくとも今回用いたコーパスにおいては、主に次の2点に集約される。

A: 心身の機能の制約としての「インペアメント」が人体に存在しない状態

B: 人間の属性に依拠した、人間の社会生活における社会的障壁が存在しない状態

逆にいえば、否定の「前提」には、それぞれ下記のA'およびB'がコンテキストにおいて所在するということになる。

A':心身の機能の制約としての「インペアメント」が人体に存在する状態

B':人間の属性に依拠した、人間の社会生活における社会的障壁が存在する状態

今後、障害者福祉政策や啓発活動の進展により、インペアメントについても「社会モデル」的用法の使用が増加する可能性が展望できる。それには既存のコーパスの更新、また新たな

⁹ 元 NASA 宇宙飛行士（女性）へのインタビュー記事。

コーパスの構築による実証分析の余地が残るところであろう。

6. 結論

以上の分析および考察により、社会的文脈における否定辞ナイの作用についての議論を試みた。しかし、書き言葉のデータは日々生産されていることから、一定の時系列において集約されたデータを収蔵した公開コーパスを用いた研究の限界も示されている。また、「障害のモデル」についての知見も変化しているため、今後はより通時的かつ動的なデータを用いた継続的な分析が必要となるであろう。

謝 辞

本論文は、国立国語研究所と Lago 言語研究所が開発した NINJAL-LWP for BCCWJ および NINJAL-LWP for Tsukuba Web Corpus を利用しました。

文 献

赤瀬川史朗 (2016) 「日本語コーパスとコーパスツール」 赤瀬川史朗・プラシャント・パルデシ・今井新悟 (共著) 『日本語コーパス活用ガイド——NINJAL-LWP 実践ガイド』 大修館書店, pp.5-45.

Colin Barnes, Geof Mercer, and Tom Shakespeare (2010) *Exploring disability: a sociological introduction* (2nd. ed.). Polity Press.

Maria Berghs, Karl Atkin, Chris Hatton, and Carol Thomas (2019) “Do disabled people need a stronger social model: a social model of human rights?”, *Disability & Society*, 34: 7-8, pp. 1034-1039. (<https://doi.org/10.1080/09687599.2019.1619239> よりダウンロード可能)

今井新悟・赤瀬川史朗・プラシャント・パルデシ (2013) 「筑波ウェブコーパス検索ツール NLT の開発」『第 3 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp.199-206.

(https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no3_papers/JCLWorkshop_No3_26.pdf よりダウンロード可能)

石川准・長瀬修 (編) 『障害学への招待』 明石書店.

国立国語研究所 (2011) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (DVD 版データ).

工藤真由美 (2000) 「否定の表現」 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (共著) 『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』 岩波書店 pp. 93-150.

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den (2014) “Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese”, *Language Resources and Evaluation*, 48, pp.345-371.

泉子・K.メイナード (2004) 『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』 くろしお出版.

宮崎康支 (2016) 「日本の新聞にみる「発達障害」概念の使用：1984 年から 2014 年までにおける『朝日新聞』および『毎日新聞』の関連記事に対する定量・定性的分析より」 総合政策研究, 52, pp. 53-67. (<http://hdl.handle.net/10236/14895> よりダウンロード可能)

Nagase Osamu (2008) “Development of disability studies in Japan: A brief outline”, *Disability Studies Quarterly*, 28: 3. <http://dx.doi.org/10.18061/dsq.v28i3.116>

佐川誠義 (1976) 「日本語の否定の範囲」 言語研究, 70, pp. 1-22.

榊原賢二郎 (2019) 「障害社会学と障害学」 榊原賢二郎 (編) 『障害社会学という視座 社会モデルから社会学的反省へ』 新曜社 pp. 152-201.

障害学会 (2012) 『障害学会会則』 .

<http://jsds-org.sakura.ne.jp/category/%e4%bc%9a%e5%89%87/>

杉野昭博 (2007) 『障害学 理論形成と射程』 東京大学出版会.

筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所 (n.d.) 『NINJAL-LWP for TWC』 .

<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>

The Union of the Physically Impaired Against Segregation and the Disability Alliance (UPIAS and DA) (1975) *Fundamental Principles of Disability*.

<https://disability-studies.leeds.ac.uk/wp-content/uploads/sites/40/library/UPIAS-fundamental-principles.pdf>

渡辺克典 (2014) 「障害学と障害者運動の研究動向」 保健医療社会学論集, 25:1, pp. 24-29.

(https://doi.org/10.18918/jshms.25.1_24 よりダウンロード可能)

山泉実 (2015) 「否定」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 三省堂, p.188.

関連 URL

NINJAL-LWP for BCCWJ

<http://nlb.ninjal.ac.jp/>

NINJAL-LWP for Tsukuba Web Corpus

<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>